

体 育 科 学 習 指 導 案

指導者 熊野町立熊野第四小学校
教諭 ○○ ○○

1 日時 令和5年9月13日(水) 第5校時 熊野第四小学校体育館

2 学年 第4学年

3 単元名 「みんなでクエスト! すごろくとびばこ!」
B 器械運動 ウ 跳び箱運動

4 単元について

(1) 単元観

本単元は、小学校学習指導要領(平成29年告示)解説体育編第3・4学年「B 器械運動」「ウ 跳び箱運動」を受けて設定した。跳び箱運動では、その行い方を知るとともに、自己の能力に適した切り返し系(開脚跳びなど)や回転系(台上前転など)の基本的な技をしたり、それらに十分に組み込んだ上で発展技に取り組むこと(知識及び技能)や、自己の能力に適した課題を見付け、技ができるようになるための活動を工夫するとともに、考えたことを友達に伝えること(思考力、判断力、表現力等)、運動に進んで取り組み、きまりを守り誰とでも仲よく運動したり、友達の考えを認めたり、場や器械・器具の安全に気を付けたりする力(学びに向かう力、人間性等)を育成することをねらった単元である。

(2) 教材観

跳び箱運動は、開脚跳びを含む切り返し系と台上前転を含む回転系の二つに分かれ、本単元ではその両方の基本的な技を習得することを目標としている。どちらも、「助走・踏切り・着手・空中姿勢・着地」といった技を構成する5つの動作があり、技を成功させるための大きなポイントとなっている。例えば、助走でしっかりスピードを出すことや両足でしっかり踏み切ること、両手で着手し自分の体を支えること、着地に向かうまでの空中姿勢、そして、両足で着地すること等が大切になる。

また、跳び箱運動は比較的短時間で一つの技が終わってしまうため、自分自身の動き方や課題に気づきにくい特徴がある。一方で、客観的に見ると技の完成度が高まりやすいという特徴もある。これらの特徴も踏まえ、ICTを活用しながら自他の技を振り返ることも必要になる。

本単元では単元を通して「すごろくとびばこ」に取り組む。これは、マス目に技の一連の動作がポイントごとに示されたすごろくで、技の習得・習熟が進むとすごろくのこまも進むようになっており、技の完成となるゴールを目指して取り組んでいく。この教材を設定した理由は3つある。

最も大きな理由として1つ目は、こまの進み具合で学習の成果を確認・実感できる点がある。本教材はマス目に示してある課題をクリアするとこまが進むというように、成果を視覚的に実感できるものになっている。成果を視覚的に示すという点において、自分の頑張りが、小さな成長から「できた」という思いを感じたり、その積み重ねを実感できたりすることをねらいとしている。こうした達成感を実感できる場を設けることで、児童が運動への意欲や楽しさに気付ける機会としたい。

2つ目は、児童がスモールステップで技に取り組める点である。後の児童観でも述べるが、技能面の理解や習熟に課題があったり、跳び箱運動へ苦手意識があったりする児童が、一つの技を細かなポイントに分けて取り組むことで、一つ一つの動きに集中して取り組むことができる。

3つ目は、すごろくのマス目に示す内容を児童の気づきや発言を基に作成することによって、児童の学習への意欲の向上に繋げる点である。児童に、自分たちで学習を進めていく実感をもたせ、関心・意欲を高めることをねらいとしている。

本教材はこのような活動を取り入れることで、技の習得だけでなく、友達と関わり合いながら互いに自分の力を伸ばしていくことができるものである。

(3) 児童観

児童の実態については、アンケートをもとに記入しています。

(4) 指導観（太字網掛けは共生の視点・太字下線は関わり合いの視点）

指導にあたっては、課題解決のための試行錯誤を促す手立ての一つとして、ICT機器を取り入れる。教材観でも述べた通り、跳び箱運動は技が短時間で完結するという特徴がある。そのため、自分の動きをタブレットで動画撮影し、自分や友達の動きを何度も見直すことで、互いの動きの良さや課題を見付けたり、友達の動きの良さを自分の動きに取り入れたりして、友達との関わりの中での技の習得・習熟に繋げたい。

単元の構成としては、第一次で学習の進め方やきまり等に関するオリエンテーションを行い、手本となる跳び箱運動の動画と自分の動きを見比べ、自分の技の現状を把握し、目指す姿を捉えてから第二次の学習活動に向かう。第二次では、台上前転の技の習得・習熟に取り組む。それぞれの技の基礎的なポイントをおさえた上で、更に進化させるためにはどうすればよいか、グループで場の選択やアドバイス、振り返りを行い、仲間と協力しながら技の習熟を目指す。また、どの児童も自分の現状や課題を明確にできるよう、考える視点を与えた上で、手本の動画と動きを比較したり、グループで話し合ったりする時間を設ける。加えて、ゆりかごやカエルの足打ち等の系統的な慣れの運動に取り組んだり、それぞれの課題に即した多様な練習場所を設定したりして、全員が技に挑戦しやすい場をつくる。

また、教材観にもあるように、「すごろくとびばこ」をグループで協力して技を磨いていく手立てとして用いる。授業時間内に進んだこま数を、グループのポイントとして換算し、その時間ごとの獲得ポイントを振り返り、多くのポイントを獲得したグループのアドバイスを全体で共有する。これによって、考えたことを友達に伝える力の向上に繋げたり、個人だけでなく、グループで技を習熟させることへの必要感と意欲をもたせたりしていく。

第三次では、第二次で習得した技をグループで組み合わせ、発表会を行う。本単元のまとめとして、台上前転や自分ができる技を発表し、友達や自分の頑張りを認め合う場として設定する。

また本単元では、単元を通して、グループと全体の二つの場での振り返りの時間（リフレクションタイム：以下RT）を設ける。グループでのRTは、グループのメンバーそれぞれの課題について、アドバイスをしたり新たな課題を見付けたりする時間とする。全体でのRTは、グループでのRTを繰り返す中で得た気づき等を、全体で共有することを目的として設けている。グループから全体へ、RTの場を広げることで、新たな気づきや自分の課題を解決するためのヒントを得る場とし、仲間と活動することや、振り返りをする事の良さに気付かせたい。

5 単元の目標

知識及び技能	跳び箱運動の行い方を知るとともに、自己の能力に適した切り返し系（開脚跳びなど）や回転系（台上前転）の基本的な技ができるようになること、また、基本的な技に十分に取り組んだ上で、それらの発展技に取り組むことができるようにする。
思考力、判断力、表現力等	自己の能力に適した課題を見付け、技ができるようになるための活動を工夫するとともに、考えたことを友達に伝えることができるようにする。
学びに向かう力、人間性等	運動に進んで取り組み、決まりを守り誰とでも仲よく運動したり、友達の考えを認めたり、場や器械・器具の安全に気を付けたりしている。

6 単元の評価規準

知識・技能	・跳び箱運動の行い方について、言ったり書いたりしている。 ・切り返し系（開脚跳び）や回転系（台上前転）の基本的な技ができる。 ・基本的な技に十分に取り組んだ上で、発展技（かかえ込み跳び）にも取り組むことができる。
思考・判断・表現	・自己の能力に適した課題を見付け、技ができるようになるための活動を工夫している。 ・考えたことを友達に伝えている。
主体的に学習に取り組む態度	・跳び箱運動に進んで取り組もうとしている。 ・きまりを守り、誰とでも仲よく運動をしたり、友達の考えを認めたりしようとしている。 ・場や器械・用具の安全に気を付けている。

熊四体育科単元モデル

第4学年

領域B 器械運動

ウ跳び箱運動

本質的な問い（何度も問い直され答えが更新され続ける問い）
跳び箱運動の楽しさって何だろう。

単元を貫く問い（単元を通して考え深めていく問い）
クラス全員が技を進化させていくためには、どうしたらいいのだろう。

学習の流れ

45分

次 時数	第一次	第二次				第三次		
0分	1	2	3	4	5	6	7（本時）	8
	①オリエンテーション （用具や場の準備・学習のルールなどの確認）	①（整列・挨拶・準備運動・場の準備）						
	②慣れの運動 （かえるの足打ち、かえるの逆立ち、ステージ上がり、ステージ降り）	②慣れの運動（なりきり動物じゃんけん）						
	③めあての確認	③めあての確認						
	④リフレクションタイム	④試しの運動（課題に応じた練習）						
	⑤試しの運動	⑤リフレクションタイム						
	⑥振りの振り・片付け・挨拶	⑥自己課題に取り組み運動（チャレンジタイム）						
	◆予想される振りの振り 開脚跳びは3年生の時に学習したな。台上前転は、高いところで前転をするのが怖そう。跳び方のポイントが知りたい。	●予想される振りの振り 開脚跳びと、これから学習する台上前転は手のつき方や体の動きが違うと分かった。どのよう動けばいいのだろうか。	◎予想される振りの振り 高さのあるマットで前転するためには、両足で強く踏み切ることが大切だと分かった。跳び箱の上で前転する時のポイントは？	☆予想される振りの振り リズムよく走って、両足で強く踏み切ることでお尻を高くすることができた。着地するときには、着地を助けることができた。着地するときには、着地を助けることができた。	★予想される振りの振り 跳び箱の手前に手を置き、頭からコロコロと前転すると、着地しやすかつた。これまでに学習したことを使って、跳び箱の上で前転したい。	◇予想される振りの振り 跳び箱の上で前転ができるようになるまで、前転が曲がってしまう。まっすぐ前転するためのにはどうすればいいのだろうか。	○予想される振りの振り 友達のアドバイスをもとに練習したらまっすぐ回れるようになった。できるようなったこと、得意になったこと、嬉しかったことを発表しよう。	□予想される振りの振り 最初よりも、台上前転が楽しくなったし、できるようなったこと、得意になったこと、嬉しかったことを発表しよう。
評定 規程	知・技 思・判・表 学びに向かう力							

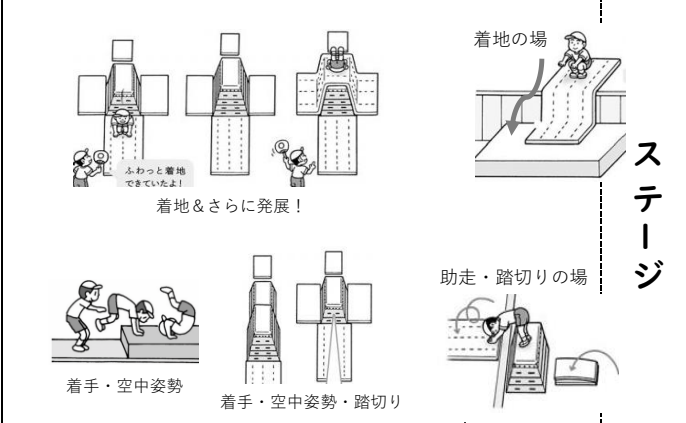
目指す児童の姿（ゴールイメージ）
友達との学び合いの中で、楽しく跳び箱運動に取り組むことができる児童

8 本時の学習展開

(1) 本時の目標

- ・自分の能力に適した課題を見付け、その解決に向かって工夫して運動している。
(思考力・判断力・表現力等)

(2) 学習の展開

主な学習活動	◇指導上の留意点 ◆「努力を要する」状況と判断した児童への指導の手立て ☆児童の気付き ◎共生の視点 ■関わり合いの視点 RT…リフレクションタイム	評価 (☆) 【評価方法】
1 チームで運動の場や用具の準備、準備運動、慣れの運動をする。 2 本時のめあてを確認する。	◇課題に沿った慣れの運動をサーキット形式で行うようにする。 ◇これまでの学習で見付けた台上前転における自分の課題を確認し、めあてを提示する。	
仲間と協力して、台上前転をさらにレベルアップさせることができる。		
3 グループで自分の目標を共有し取り組む。	◎実態に合わせて取り組むことができるよう、それぞれの課題解決に必要な多様な練習場所を用意する。 ◇タブレットで技を撮影し合い、RT の際の振り返り手立てする。	
4 台上前転をレベルアップさせるためにはどうすればよいか、それぞれの課題から考える。 【リフレクションタイム】 (全体での振り返り)	◎グループの仲間の課題に合った練習場所へグループで移動し、練習・観察し、気付きを伝え合う。 ◎練習する児童の課題に注目しながら観察し、その後気付きを伝え合う。 ◆観察する場面を焦点化したり、WS に観察の視点を具体的に示しておいたりして、グループ全員が活動に参加できるようにする。	【RT の教師からの発問】 ・どうして、台上前転が更に上達したのでしょうか。 ◇グループでの RT の中で出た児童の気付きや困り感を挙げながら、それぞれの課題に対する解決方法を全体で交流する。 ◇踏切りや着手等、視点を絞りながら具体的に問う。 ◆考えを伝えにくい児童には、グループの仲間の言葉を WS にメモさせておく等する。
	【RT に繋がる働きかけ】 観察する場面を焦点化することで、友達 の動きの良さや課題に気付かせる。 (助言・評価・問いかけ)	【キーワード】 ・勢い ・両足 ・手前 ・頭の後ろ ・まっすぐ回る ・手が平行

5 リフレクションタイム
での友達の振り返りを基
に技に挑戦する。

6 振り返りをする。
(個別での振り返り)

◇RT で聞いた友達からの気づきを基に、技に再チャレン
ジする。

◇本時の成果として、グループ内でミニテストを行い、ク
リアしたらすぐごろくのこまを進める。

◇自分や友達の課題や困り感に対し、どのように取り組ん
だか、取組の成果を振り返る。

今日のポイント

- ・助走で勢いをつける。
- ・両足で踏み切る。
- ・両手で手前に着手する。
- ・頭の後ろをつけて前転する。

☆自分の能力に
適した課題を
見付け、技がで
きるようになる
ための活動を
工夫している。
(思考・判
断・表現)【児
童観察・WS】

まとめ

跳ぶ前に勢いをつけて走ると、前転しやすいと分かった。

友達の意見を聞いて、跳び箱の手前に手をつけるといいと分かった。

友達の姿を見て、頭の後ろを跳び箱につけることを意識するとめらかに台上前転ができた。



視点1 効果的なリフレクションタイムであったか。(視点：手法、発達段階、場面設定)

- 学級全員で解決する姿が良かった。(児童のつぶやきを教師がひろう→他の児童の課題解決へ)
- めあてとRTが繋がっていた。(最後の振り返りにも「協力」という言葉を出した方が良かった。)
- 児童の悩みを児童の言葉(音、リズムなど)で解決することで、全員が理解しやすい。
- ORTと運動の切り替えが早い。
- 知識を生かしたアドバイスをしていた。切り替えし発問◎
- 動画の生かし方→その場で確かめても良かった。
- RT→運動への切り替わりで取り組むのに時間がかかる児童には声かけをしていく。

視点2 教材や場の工夫は、児童が学習のねらいを達成することに有効であったか。

- スモールステップでの取組により、楽しさを味わわせることができていた。
- いろいろな課題に取り組むことができる場があって良かった。
- 使っていない場を課題解決のヒントとなる場にする。
- グループの決め方が良かった。(レベル別に分けることも良い。)
- 児童同士でアドバイスをたくさん伝えていた。
- 跳び箱に貼物のすることやホワイトボードに書き込むことで可視化する。
- グループごとで課題に合わせて場を変えていけると良かった。
- 「進化する」の捉え方の統一を図る。単元のゴールを工夫して価値づけていく。
- 安全面を考慮する。(マットの置き方、児童の観察する場所など)

☆徳永教授より☆

児童自身がいかに自分の課題をもつか(授業づくりのベースになる)

どのように課題をもたせるのかが教師の働きかけ

「表現力」：伝える→何をどうすればいいのかという意識をしっかりと持っている。

「できるようになる」：体育の楽しさ

台上前転がきれいにできればOKなのか？スモールステップでたくさんの「できた」を用意していた。学習の進め方が○

教師が「できる」をどう捉えておくのか、小さな達成感を味わえるようにしていく。

児童相互の関わり合い(できることを認め合う、できるようになるために助ける)

自分のことだけでなく、グループの友達のことでも考えることができていた。

今日のポイント→課題をしっかりと把握しているため、RTでどう広げて、どのように解決していくか。

グループでのRT、全体でのRTを使い分けていた。練習する時間があればあるほどいいわけではない。RTによって課題を解決するためのヒントを得ることができる。

次時は練習する時間をしっかりともつ。【単元レベルでRTをどう組み込んでいくのか】

「わかる」(認識)と「できる」(練習)を統一することが大切。

→主体的・対話的で深い学びに繋がる。

RTでの教師の問いかけ(何をどう問いかけるのか)

問い→答え→問い→答え(繰り返し発問でより具体的な言葉が出てくる)

【発問を精査していくこと】

ICT機器の活用→自分たちの技を分析する。評価の材料にする。新たな課題を見付ける。

何のためにどのように使うのか、しっかりと考える。

ICT機器にこだわる必要はない。

教えたいことを学びたいことにする。

評価すること＝指導すること、子供たちが自信をもつことができる。